

【曙保育園】●2024.10.24 ふりかえり(エコエデュスタッフ／遠藤知里先生)

全員:お疲れ様でした。

スタッフ①:

今日は「五感を使いながら自然遊びを考えることで、自然物に対して新たな視点が生まれ、園での遊びが広がる」というねらいでやりました。それでは、スタッフの皆さん、今日のふりかえりをお願いします。

スタッフ②(2歳児担当):

はい。最初は、何か動くものを見つけたら、それを追い掛けたり、触れる子は少し触ってみたりという遊びをしました。先生も怖々ながら一緒に追い込んでくれたので、そうしてカップに入れた昆虫をじっくり観察するということもしましたし、逃がすときには、「ちょっと触られるかなあ?」と言って、少し手を触れたり、押さえている状態で軽く撫でたりという挑戦もしました。そんな感じで結構、虫に触ったり、自分から積極的に葉っぱをちぎっては匂いを嗅いだりといった体験が出来たのではないかと思います。

そして、お茶を飲みたいという話になったので、先生と一緒に下へ降りて来たんです。そしたら、そこにいろいろな形の葉っぱがあって、ちょうどそのとき、アニメのキャラクター『プリキュア』のハンカチを出して見せてくれた子がいたんですよ。そこで、「ああ、いろいろな葉っぱがあるねえ。それじゃあ、これを付けてウサギー!」と、私がやると、それを機に変身ごっこをしようという流れになって、様々な葉っぱを化粧のように着けては、プリキュアだと言う子もいれば、アンパンマンだと言う子もいました。

すると、先生がネコのしっぽをやってくれて、それを見た子どもは、枯れた針葉樹の葉を着け、ヘビのしっぽをやったりもしていましたし、恐竜になりたいと言う子には、手のような葉っぱを見つけてつけてあげたりもしました。

そういうごっこ遊びなども少し出来たんですけど、最後のふりかえりをしている際、石を見つけた子が、それを何気なく置いたんですよ。そうしたら、それが何ともいいサイズで、「これは椅子になるかも知れないよ」と言ったら、他の子も自分のお気に入りの椅子を選ぶと言って、石を集めて来ては、うまく座れるかどうか試すという遊びが始まりました。しかも、みんな、それが気に入ったようで、「それじゃあ、その石を積み重ねられるかなあ?」というので、今度はその石を積む遊びも始まり、ちょっとした焚き火の竈の様なものまで出来ました。

スタッフ①(2 歳児担当):

では次は、同じく 2 歳児を担当した私から。

うちは 6 人中 3 人がずっと泣いていて、やはり親と一緒に来た子を離すというのは中々難しいですね。1 人か 2 人は、最後までずっと引きずっていました。ただ、あとの半分は自分で遊べる子だったので、五感についての話をし、「この葉っぱは長いね」と言うと、こっちの方が長いとか、こっちの方が短いなどと、先生も入り、長さ比べがどんどん続いて行きました。「これはどうかな？あれはどうかな？」という感じで、視線がずっと下を向いていましたね。

そこからいろいろなものを探そうという雰囲気が見受けられました。そこで、ちょうど黄色い小さな花があったので、「これを擦ってみようか？」と伝え、やってみたんです。すると今度は、小さな花をどんどん探して行くという光景が、3 人の子どもには見られました。

その後、トンネルの方に行き、そこで葉っぱのお手紙を書いたんです。いろいろと発見する子はとても意欲的で、どんどん自分で取って来ては書いて、というのを繰り返しながら自主的に進み、そして、栗の木エリアにたどり着きました。

ここで一人の男の子が棒を見付けて大きな石を叩き、「トントン音がする！」という反応を示したんですよ。そうしたら、他の子も叩きたい！となって、次から次へと木を叩いてみたり、あちらこちら叩いては、「いろいろな音がするね」となりました。

こんな感じで今日は、一人の子が見付けたものがどんどん広がっていくという様子が多く見られたと思います。本当に一人の子の一つのことから、みんなの遊びに繋がっていくんですよ。

泣いていた子たちも、自分が興味を持ち、面白いと思うと、段々視野が広がって行きました。だから、最後の方は、自分もこれをやってみようという感じで、自ら遊びを見つけられたりもして、そこはよかったなあと思っています。

スタッフ③(3 歳児担当):

うちは、あとで聞いたところ、元々集まるということが少々大変な子どもたちが多かったらしく、最初の五感の話をする以前に、先生が子どもたちを集めようとしても集まらないんです。しかも、そのうちの 1 人は母親が恋しくて、ずっと泣いていました。

あとは、もうとにかく先に行きたくて、周りを気にせずどんどん進んで行く子と、じっくり遊びたい子ですね。そこに泣いている子と、いろいろな子どもがいたので、ペースもバラバラで。なのでもうとにかく沢山歩いて、思い切り発散させました。ですから、遊びを見つけるとか、五感で何かという感じではなかったんですけど、目一杯歩いたことで、みんな清々し

た顔をしていましたし、とにかく気持ちはよかったんだろうと思います。それに、クマさんがいるとか、カマキリがいるという感じで、いろいろな発見もあって、とても楽しそうでしたね。

スタッフ④(3 歳児担当):

やはりお父さんやお母さんの姿がちらりとでも見えると、急に顔が曇るんですよ。そういうことが度々ありましたが、最初にじっくり五感の話をしてから入ったお陰で、手を使ったり、目を使ったり、鼻を使うといったことは一応、自分が下見した通りに出来ました。とはいえ、私の話を聞いている子は、8 人中 1 人か 2 人で、他の子は違うことをやっています。特に虫の好きな子は、もうずっと虫を追いつけていましたし、先生が呼んでも来ないんですよ。

ですので、もうとにかく、1 人か 2 人聞いてくれていれば、その場所はよしということにしたんですけれども、そのあと、誰かがイヌガヤの実を押したらしく、あのネバネバした中身が出てしまったんですね。そうしたら、やはり少し混じっていた他のグループの子が、甘いと言ったんですよ。

スタッフ①:匂いがですか？

スタッフ④:はい、イヌガヤの実の匂いですね。

スタッフ②:確かに、何かすごくいい匂いがすると言いながら歩いていた子もいました。

スタッフ④:

その子が、すごく甘い匂いがすると言うと、うちの子たちもみんな、「ああ、甘いんだね」となりました。

スタッフ①:結構、気付いてくれましたね。

スタッフ④:

それで進んで行ったんですけれども、途中、やはり走ってしまう子もいれば、転んでしまう子もいて、歩くのはかなり危なかったですね。それでも、何とか向こうまで出て戻って来られましたので、早めにふりかえりをすることにしました。

どれがお気に入りだったかと尋ねると、何人かの女の子が、プニプニした木の実がよかったですとか、栗のツルツル感がよかった。あるいは、男の子だと、カマキリや蜘蛛を見つけたのがよかったと言っていました。

そして最後にみんなで遊ぼうということで、草相撲を始めたところ、乗って来たんですよ。

スタッフ①:楽しそうでしたよね。

スタッフ④:

それで、他のグループの子たちも一緒に入って戦って。「こちらの方が強いから、強いかもしれない」などと言いながら、どれが強いのかを自分で考えて取って来ていました。なので、先生も「こちらの方が強いかも知れないね」などとおっしゃってくださっていて、発見出来た子もいれば発見出来なかった子もいると思いますが、取り敢えず遊べるということが分かりましたね。

スタッフ⑤(4,5 歳担当):

4 歳児と 5 歳児については結果的に、テーマを作ったことにより、保護者ボランティアにお任せしたんですけれども、それぞれのチームで本当にいろいろなことを発見したようでした。で、後ろも気になって、付き添ってくださっていた先生に「どうですか?」と尋ねたところ、いろいろなものを見つけているということでしたから、様々なものに目がいったようです。

恐らく、きちんと見つけなければならないものをテーマとして示したことで、それとは違うものにもどんどん目がいったのだと思います。

スタッフ①:この見つけたものは、このテーマの中には該当しないということですか?

スタッフ⑤:

そう、これは、このテーマに当てはまらないというものを、沢山見つけられたということで、それが一番よかったと思います。

それが一つと、もう一つは、前の子が落ちている栗を全部拾ってしまうんですよ。それも、割れたものには見向きもせず、綺麗なものだけを拾って、「ここにもあったー!」などと声を上げるものですから、「一番前の子たちがこうして全部拾っちゃうとどうなるかなあ?後ろの子たちも拾いたいんじゃないかなあ?」と、繰り返し言いました。加えて、「あれっ、これは中身がないね。動物たちに食べられたのかな?」などという話もし、「これは動物も食べるし、後ろの子たちも拾いたいよね」と言うと、その中の一人が、「僕は今、ちょっと我慢してるんだよ」と言い始めたんですよ。だから、私は最初から最後まで前方にいたので、前の方の親御さんたちとしか関われなかったんですけれども、それを聞いて、単にあれば駄目、これは駄目、拾ってはいけないと言うだけではないという部分が伝わればいいなあと思って、そういう声掛けをしていました。

それで最後のふりかえりも、殆ど時間がなかったものですから、取り敢えず保護者の皆さんに向けて、何かこれを見つけないとか、こういうものがあつたらいいというものを持って

探しに行くと、きっといろいろなものが見つかるのではないかという話をして終わったという感じです。因みに、子どもたちからは、一応、「いろいろなものを見つけたよ！」という顔が見られましたので、あえて聞かずとも、ほっとしました。

課題としては最初のところですね。保護者の方々も、始まってしまえば結構、「よし、自分の出番だ！行くぞー！」という感じだったんですけども、その前は、もう栗に気を取られて、全然集まらなかったんです。でも、そこを満足させなければ始められません。なので、その辺りが課題でした。

スタッフ①:保護者の方が栗に気を取られていたんですね？

スタッフ⑤:

はい。で、私もしかたがないと思いましたが、先生もどうしてよいのか分からないという部分があったようです。しかも、小さい子たちが先にトイレに行ってしまったでしょう。だから、大きい子たちは我慢していたようで、そこでみんなトイレに行ってしまったんですよ。

スタッフ①:時間が短かったんですよね。

スタッフ⑤:

そう、時間もすごく短かったですから、もう少しその辺りをイメージし、予め連携しておけばよかったというのが自分の反省点であり、今後の課題としてあります。以上です。

スタッフ⑥(保護者対応):

うちは大人のみでした。人数は28名と多かったですが、皆さん話を聞いてくれたので、やりやすかったです。中には、ここへ来たことがないと言う人もいたんですけど、特にそういう人などは新鮮だったでしょうし、結構楽しんでくださったのではないかと思います。

今回は、自然遊びというものを親に知ってもらわないと子どもたちに伝えることはできないので、実際にクサギの葉の匂いを嗅いでもらうということを全員にしてもらいました。しかも、そこには実が付いていたので、この実はこういうふうな実で、クサギ染めに使うこともあると、そういう話もしました。

それから、花の匂いも嗅いでもらって、花の匂いと葉っぱの匂いは全然違うでしょう？と。花はいい匂いがしますが、葉っぱの方は子どもでも、臭いと言う人もいれば、いい香りだと言う人もいると言う話をしたあと、皆さんに「どんな匂いがしますか？」と尋ねたところ、「松みたいな匂いがする」ということでしたね。

でも、何せ人数が多いですから、全員にやってもらおうと思うと、時間が掛かるんですよ。だから、いろいろな自然遊びを説明しようと考えていたのにも拘わらず、実際はその半分も出来ませんでした。

あとは崖のところへ行くと、まず、椎の実が落ちていたものですから、それを拾って、「この椎の実を食べられますが、どんぐりは食べられませんよ」という話をしました。そうしたら、以前、どんぐりを食べてしまった人がいたらしく、体が痺れてどうしようもなかったと。

さらに、3 歳以上、年中か、年長辺りでしょうか。それに小学生は、この斜面を登らせると言う、「へえ、ここを登るんですか？」と言う訳です。だから、子供たちは結構登るのが上手だという話をし、「もしよろしければ、皆さんも挑戦してみますか？」と言いましたが、誰もチャレンジしませんでしたね(笑)。

あと、皆さんはウラジロの葉というのを全くご存じなかったの、こうして表と裏を見せましたが、それでも分からず、「これが何か分かりますか？」と聞くと、「分かります。眠り草です」と。

スタッフ①:眠り草？

スタッフ⑥:

そう、触ると眠った風になってしまうので、眠り草ではないかななどと言うんですね。だから、「触ってみてください。眠らないでしょう？」と伝えました。親も知らないんですよ。で、これは正月飾りに欠かせない葉っぱだと言うと、「これがそうなのかぁ！」という感じでしたから、そういう意味では、親も結構いろいろなことを発見出来てよかったのかなと思います。

あと、葉っぱを使った飛行機遊びもやりました。そして、「今度はこれでバツタが出来るんだよ」と。葉っぱを折ってバツタを作り、ピョンとやると飛び上がる訳です。そうしたら、みんなまた感激するんですね。だから、それもそうやって一回見せたあと、皆さんにもやってもらって、「行くよ行くよ！」と。そういう遊びをしました。

それで、最後にアオキの葉っぱと小枝を拾ってもらったんですけど、アオキの葉っぱを取るときには、「一枚くださいね」と言って取らせてもらうようにと言うと、親もみんなそう言って取ってました。これはいいなぁと思いつて、「あそこの東屋で、お手紙を書きましょう。皆さん、大好きな人にラブレターを書いてください」などと言いました。そうしたら、「誰に書こうかなぁ？」と言うものですから、「パパ大好き！」と書けばいいと思うと言うと、そう言えば…という感じで、「そうですね」なんて言っていました。「せっかく書いたんですから、持って帰ってパパにあげてくださいね」と言う、「はい、あげます」と言ってくれました。そういう感じで、子どもたちはいつもこういう遊びをしているのだということを知ってもらえるようにしました。

そして、最後に、栗も食べられるところだけではなく、食べられないところもいろいろと使えるという話をしました。

スタッフ①:

栗に目玉シールを貼ると可愛くなるんですね。皆さん、すごく可愛いと言ってました。

スタッフ⑥:

なので、栗も食べられるところだけでなく、こういうふうに使えるところもあるという話をしました。以上です。

スタッフ⑦(1 歳児と保護者対応):

私は 1 歳児というのはこういうものだとか、子どもの目線に立つということ。そして、こうしたボコボコしたところや不安定な場所を歩く経験は、是非、こういうところでして欲しいというようなことを、保護者向けにお伝えしたいと思い、ふりかえりのときにもお話しさせていただきました。

保護者の方がいたので、1 歳児たちはどうしてもそっちに行ってしまうんですね。でも、強引に連れ戻すのは可哀想ですし、「私が見えている限り、あそこに戻ればいいんだと思って、もう親元に来させて上げてください。一緒に遊んでいただいて、私が呼んだときにまた、合流していただいても構いません」と言い、そんな感じで付かず離れずの形でやって行くことにしました。

そうして、広場の方に行ったとき、最初、あるお父さんがコオロギを見付け、みんなを寄せ集めて見せてくれたんですね。手に持って見せてくれたんですけども、ちょうどそのとき、別の誰かが、「あっ、カマキリもいる！」と言いました。というのも、実は出発前にカマキリがパッと飛んで、お母さんの一人が、「あっ、何か飛んだ！」と言ったんですよ。だから、「さっき飛んだカマキリかな!？」ということで、みんなが集中して、一人ずつそのカマキリと「こんにちは！」のご挨拶。「カマキリのお顔を見て挨拶してください」と言うと、子どもたちもそうですが、お母さんたちも挨拶しましたよ。

そのあと、子どもが一人、森の中に入って行ったので、「みんなも行ってみる？」と聞くと、「うん！」ということで、森へ行きました。実は最初、「虫が嫌いな人はいますか？」と尋ねたところ、ほぼ全員が手を挙げたんですよ。しかも、森林は少々暗いですから、怖がるのではないかなと思ったんですけども、広場で虫たちとの出会いがありましたでしょう。そうしたら、初めは親に抱っこだった子たちが、「これは何だろう？」という感じで、わらわらと下りて来たんですね。なので、それはよかったなあと思いました。

すると、森の中に、アケビがぽーんと落ちているのを見つけたんですよ。なので、これは何でしょうか？」と質問すると、「アケビ！」と答えてくれた人がいました。

そうこうしているうちに、子どもの一人が「もういいかい！」と言ったんですね。そこで、かくれんぼの遊びを知っているんだと思って、「それじゃあ、私が 1・2・3…と数を数えるから、みんなはおうちの人と隠れてね！」と言うと、こんなふうにもう顔だけ…。

スタッフ①:みんな顔だけ隠す？

スタッフ⑦:

そう。でも、もうバレバレでも構わないんですよ。一人ずつ「みつけた!」と言って、1歳児でもそういうことが出来たという一つのケースですね。

それで、後半は3歳児と同じく、走りたい子と、ゆっくり進みたい子に分かれて、走りたい子たちは、もうずっと下の段を走っていました。そして、残りは抱っこでゆっくり下を歩いて来たんですけども、それでも、それぞれがいろいろなものを見付けていたようです。

そうしたら、大人は生き物に対する先入観がありますから、これは恐いとか、嫌なものだと言いますが、子どもはまだ、「これは何だろう?」と、そこから新しい初めての出会いが始まり、そこに好奇心が芽生えるのだということが分かったと。だから、これからいろいろな出会いを大事にしたいということを、最後のふりかえりのときにおっしゃってくださった親御さんがいらっしゃいました。

あと、虫を見せてくれたお父さんは、どの子も反応が違って、怖がる子もいれば怖がらない子もいるとおっしゃるんですよ。でも、異質なものと今まで見たことのないものを怖がるということは、決して悪いことではなく、知らないものをちょっと恐いと思うことが、しっかり身を守ることに繋がっているのではないかとおっしゃっておられまして、「お父さん、すごいですね!」という感じでした。

実際、最初は怖がっていた子が多かったんですけども、慣れて来ると、おとなしい女の子たちでも、葉っぱを集めてお料理遊びのようなことをしたり、本当に身近にある小さなものを見つけて来るんですよ。ですから、大きな森に行かずとも、近所の公園にあるような花や草木といった近くの自然で十分に遊べます。なので、そういう遊びを是非して欲しいという話をして終わりにしました。

スタッフ①:ありがとうございます。では最後に、遠藤先生お願いします。

遠藤先生:

やはり親子遠足だという期待が、特に小さければ小さいほど大きいんでしょうね。なので、「何故、お母さんと一緒に遊べないの?」という疑問があって、そこが難しいところなんだろうと思いました。

とはいえ、大泣きしていても、視線はスタッフの方に行っていたりもするんですよ。だから、うまく表現するのが難しいんですけども、大泣きしながらもそこに一緒にいられる環境が出来ていて、それはよかったなあと思います。もうみんな、ニコニコ顔でした。

スタッフ①:みんな、本当にいい顔をしていましたよね。

遠藤先生:ですので、少々淋しかったかも知れませんが、そこはよかったのではないかと思います。ありがとうございました。

スタッフ①:ありがとうございます。

因みに皆さん、ヒヤリハットなどは特に大丈夫でしたか？

全員:大丈夫でした。

スタッフ④:

ただ、この階段の下りでは、「ここから先は前の人を追い抜かないように、一列になって歩いてください」と言ったんですけれども、やはり追い抜いて横手に滑るということは、結構起きていた感じでした。

スタッフ⑤:ゴロゴロしていた人もいましたが…。

スタッフ②:せっかくですからね。

スタッフ③:

でも意外なことに、3歳児などは泥に対する抵抗がないということでしたから、坂道を登るときには、「上手に手を使うといいよ」と言ったんですよ。そしたら、みんな、すごく上手に手を使って登っていて、それなどは本当にいいなあと思いました。

で、先生とお話しているときに、普段からみんな、うわぁっと自分で遊べる子どもたちだとおっしゃったんですね。だから、「それがいいのではありませんか」と言っていたんですけれども、「自分の意思がすごくはっきりしている子たちですから、大変だったと思います」と言われたときには、なるほどと思いました。ただ、しっかり遊べる子どもたちだなとは思いましたね。

スタッフ①:地べたに座るのも嫌がる子がいますものね。

スタッフ③:

そうですね、地面にお尻を着けられない子というのは沢山います。

でも、そういうのはなく、「座ろう！」と言ったらみんな…。

スタッフ③:

でも、3歳児のある子は座らなかったですね。その子の場合は、もう最初から、シートの方には中々来られなかったんですよ。ずっと泣いていて、でも、私が鼻の付いた顔のようなゴンズイの実を見付け、「お顔のようでしょう？」と言うと、みんなが一気に寄って来たんですね。そうしたら、この子も泣き止んだので、自然に座りました。

スタッフ④:ずっと泣き続けてはいられないんですよね。

スタッフ③:

そう、でも何か見付けると、もうそんなことはすっかり忘れて遊んでしまうんです。
それでひつつき虫のすごいところに行ってしまったので、ぶわあっと全身ひつつき虫だらけ
でした。そうしたら、もう怖い恐いで、早く取って取ってと。もうびっしり付いてしまっていま
したから、自分で自分が恐かったようです。

スタッフ④:

この間も、ヌスビトハギがぶわあっと付いたところでチクチクなどしないのに、チクチクし
て痛いというイメージで言っていたんですよ。そのあと考えたんですけども、あの子はも
しかすると、アレルギー反応が出て、ブツブツだらけになった経験があったのかも知れませ
ん。それで、語彙も少ないですから、痛いとか、気持ちが悪いとしか言えなかったのではない
でしょうか。

スタッフ①:それで、とにかく取って欲しいというような…。

スタッフ④:本当はいろいろな語彙があるはずなんですけどね。

でも、あの子の場合、少しの間、それを忘れて遊んでいましたよね。で、帰るときにまた思い
出して…。

スタッフ①:見ると…。

スタッフ④:取って欲しいと。

スタッフ②:この時季は大きなひつつき虫がいますからね。

スタッフ⑤:でも、年長組の中には、「ここって、森しかないじゃん!」と言う子がいたんですよ。

遠藤先生:森しかない、確かにそうですね。

スタッフ⑤:

だから、「そうなんだよ。こんなふうに森しかないところもあるんだよ」と言ったんですけ
れども、実際に森に行ってみると、虫なども沢山いたと行っていたので、よかったのかなあ
と思います。

スタッフ①:

楽しかったですね。みんな、いい顔で過ごしてくれて良かったです。
それでは皆さん、ありがとうございました。

【一同】ありがとうございました。